

# 災害は時間も場所も選ばない

元日に発生した能登半島地震では、帰省中の人たちも被災しました。4月の台湾地震では旅行者が観光地で足止め。災害は自宅や職場で遭遇するとは限りません。慣れない土地の災害にどう備えればいいのか、国内、国外それぞれについて、専門家に聞きました。(城石愛麻)

## 旅先の観光地で被災するかも

### 訪問先のリスク調べて

#### 国内の場合

京都防災研究所 大災害研究センター 矢守克也教授

「巨震での災害対策に比べ、出先の対策は後回しになりがちだ」。京都防災研究所 大災害研究センターの矢守克也教授(防災心理学)は、休中や旅行などの「間の悪い状況」でも災害は起るとして、対策を呼びかける。

まずは、行き先の災害リスクの把握。「観光名所や治安情報を調べる延長で災害リスクを調べて」という。「風光明媚な場所は災害リスクが高いことが多い。テーマパークが立地する埋め立て地は液状化の恐れがあり、陸地の高い高層ビルは、長期地震動でエレベーターが止まる危険も」

- 旅行先では…
- 行き先のハザードマップ確認
  - 水や常備薬など不可欠なものを携帯
  - 助けてもらうばかりではなく「助ける」側になることも考える

#### 海外の場合

日本赤十字社国際部 芳原みなみさん

2023年トルコ・シリア大地震や13年フィリピン台風で現地入りし、支援活動の調整に当たった日本赤十字社国際部の芳原みなみさん(37)は岐阜県

各務原市出身。「海外では事前の情報は取集めず、現地に赴く必要」と話す。「行き先の地域渡航前には、「行き先の地域に過去に起きた災害情報を調べたり、旅行会社に尋ねたりして」と話す。芳原さんがお薦めするのは、外務省が提供している海外安全情報発信サービス「たびレジ」だ。登録してあ

### 自分の状況把握が第一

「災害ゼロ、大きな事件・事故など最新の安全情報がないで、旅行にも参加する」という。芳原さんは「緊急時は大きな荷物を持って避難先へ出る可能性がある」と話している。また、赤十字社の職員が示すように、避難時に先でも持ち歩いていると話す。芳原さんが支援したトルコ・シリア大地震では、現地政府やトルコ赤十字社(フスラム圏の赤十字社)が被災者や避難民の食料や物資を配布していたと話す。在外公館の連絡先は、旅行にもメモして持ち歩くといい。現地に住む場合は、被災地への対応が第一で、旅行(FRC)は職員に対し、緊急者が被災されるわけではない。被災地の負担を減らすために「FRC」を海外で持ち歩く方法を覚えてほしい。

### 緊急持ち出しバッグがあると安心



トルコ南東部カプラマンマラシュで2023年2月、被災地支援に入った芳原さん。後方は、食糧の配給の列に並ぶ被災者たち。日本赤十字社提供

#### 緊急持ち出しバッグの中身

- 現金
  - パスポート
  - モバイルバッテリー
  - スマートフォン
  - 変換プラグ
  - 緊急連絡先のメモ
  - 常備薬や応急処置セット
  - 1日分の水と食料
  - 上着
  - メガネ など
- なるべく小さくまとめる  
※FRCのホームページや芳原さんへの取材に基づく

### 助ける側に回る心の準備も必要



能登半島地震が発生し約1月1日、北陸新幹線の運行再開を待つ利用者。避難するJR赤松駅構内

「助ける」側になることも考える。被災地では、地元行政や消防だけでなく、被災者を助けられる方が「助ける」側になることも必要だと話している。

### 避難誘導 工夫する自治体も

観光客に災害リスクを認識してもらいやすくなるための工夫を取り入れる自治体もある。東日本大震災で津波による大きな被害を受けた茨城県大洗町では、町内の海水浴場を訪れる観光客向けに「津波避難誘導マップ」を作成、配布している。津波警報や注意報が発表された場合に避難対象となるエリアを色分けし、避難場所を明記。土地勘のない観光客でも迷わないよう避難場所への経路も矢印で示した。矢守教授は「グルメマップなど観光情報と一緒に避難情報を観光客に提供すると、観光客もハザードマップを確認しやすくなるのではないかと話した。



栗田 暢之さん 能登半島地震発生後の1月3日から、石川県六水町を拠点に避難所の環境改善や避難ボランティア

災害援手NPO「レスキューストローク」代表理事

### 被災地で考える 行政の限界部分を埋めるのが、われわれ

「行政の限界部分を埋めるのが、われわれNPOの役割だと思っています。これは、被災地では住民の理想の復興のあり方を考えるべく、行政と連携して後押ししていきたいと思っています。腰を据えた支援を続けていきます。

◇今回の「備える」は6月3日の予定です。